

6 授業 「同和教育への希い」 第35回板野郡同和教育研究大会公開授業

(1) 【指導案】

〈1991年6月25日（火）〉

同 和 問 題 （ 道 徳 ） 学 習 指 導 案

3年B組 男子18名、女子19名 計37名

指導者 森 口 健 司

① 主 題 誇りうる生き方を求めて

② 主題設定の理由

生きることの意味を一人一人の生徒と共に求めていきたい。これは私の願いである。それはすべての生徒の願いであってほしい。一人一人の生命は掛け替えのないものだから、力の限り美しく生きようと中学校最終学年のスタートを切った。

4月の学級開きの日より、私は生徒一人一人がいつか差別解消の主体者として常に美しい生き方を創造し、自らの生き方あり方に誇りを持って一人一人の人生を生き抜いてほしいと願い、同和問題学習に寄せる私自身の思いや願いを語りながら、人間としての生き方について問い続けてきた。

最終学年のスタート、2年生より営まれてきた学年全体による同和問題学習に寄せる思いを語り合う授業を通して、生徒たちは本音の部分語り出した。それは今まで漠然としか見えていなかった部落差別の厳しい現実を見せつけられることになった。私は同和教育とは、生徒たちの生命を大切に守り抜き、一人一人の生命を輝かせていく営みであると考えている。それはまさしく闘いである。西口敏夫先生の詩「よろこび」を幾度も反芻しながら、私は私自身を励まし続けてきた。

《よろこび》 西口 敏夫（元全国同和教育研究協議会委員長）

部落で生まれ、

部落で育ち、

部落でくらし、

運動と教育にいのちをかけて60年。

或るときは、烈火の叫びとなり、

或るときは、草にすだく虫の声となり、

或るときは、鋭く差別の事実に迫り、

或るときは、静かに差別の矛盾を訴えた。

このみちは、きびしい荆の道なれど、

この道はわが生涯のつとめなり。

ゆくさきは、幾多迫害ありとても、
この営みは、わが終生の、運命なり。

しかして、この営みは、
わが生命の生きがいにして、
わが生命のよろこびなり。

(『水平社宣言讃歌』より)

全学年が一九丸となって取り組んでいる学年全体学習の度に生徒たちの中から、差別の膿が吹き出してきた。それは、対象地区の生徒にとっては自分がこれから歩んでいかなければならない荆の道を見せつけられることであり、人間としての生き方に目覚めていくことでもある。対象地区外の生徒にとっては、自分自身の意識の底にあった自分の醜い部分、自らの差別心を見せつけられることである。

そんな苦しい思いの中にあっても、生徒は自分をさらけ出しながら自分自身と闘おうとしている。その姿に触れるとき、私は共に苦しみ、自分の力のなさをあやまり続けながら、共に自らの思いをぶつけていくしかないと思った。

3年全体で5月すでにすべてのクラスが公開授業の檜舞台を経験した。堂々と自分をさらけ出しながら、自らの思いをぶつけ合う生徒。仲間の訴えの中で必死に涙をためて必死にうなずき応えようとする生徒。そんな中であって、まだまだ本物になっていかない生徒の姿もある。そんな生徒に対し、怒りをぶつけ、時には優しく、時には厳しく諭していく生徒の姿がある。

そんな仲間の思いに応えるかのように対象地区の生徒が自らをさらけ出して訴えていく。その思いに応えようと地区外の生徒が涙をこらえながら、その苦しく揺れる胸の内を語っていく。この同和問題学習は、お互いの存在、人間としてのあり方、生き方を確かめ合うものであった。同和問題学習があった翌日に記されていた生活ノートの一部を紹介する。

「今日の道徳の時間、すごくつらかった。AさんやBさんが言っていた言葉の一つ一つが心につき刺さった。Aさんが泣いていたとき、僕はその気持ちが手にとるようにはつきりとわかった。僕も、部落にかかわることをよく聞いていたからだ。そのとき、僕も手を挙げて発表しようと思った。僕の手は震えていた。今までの部落にかかわる話やいろいろなことで頭の中がグチャグチャになっていた。僕は手を挙げた。先生が僕を指名した。僕はちょっと話ただけで涙が出てきた。AさんやCさんが泣いた理由がはつきりわかった。僕はもつと話すつもりだったけど、言葉が出てこなかった。これ以上話するのが本当につらかった。思い出ただけで涙が出てくる。自分でもなんで涙が出てくるのだろうかと思った。これからは頑張つてちょっとずつでも発表していこうと思う。道徳の時間が終わって、D君とE君がきた。E君は『自分は部落の人間だ』と言った。そして、『部落の人が悪いんと違う。差別する人が悪いんじゃない』と言った。僕はなんかうれしかった。こんなことを言ってくれる友だちがいることがうれしかった。」

まだまだ本物の同和問題学習への道は険しく、挫けそうにもなる、倒れそうにもなる。そのとき、私を励ましてくれるのは、私と共に生きることの意味、人間としての生き方を共に学びながら差別解消に向けて頑張ってくれる生徒たちの誠実な眼差しであり、生き生きとした笑顔であり、人間としての輝きである。その道が、どんなに険しくとも、その歩みをやめることはない。その道が困難であればあるほどに頑張る力も大きくなる。そんな思いの中で今日までの営みを続けてきた。

私は、私自身が信頼する生徒たちと、丸岡忠雄さんの生き方を学んでいった。丸岡さんの生きざまは私自身の生き方に大きな影響を及ぼしている。高校3年生のとき、私は初めて「ふるさと」の詩を知った。

《ふるさと》

丸岡 忠雄

“ふるさとをかくす”ことを

父は

けもののような鋭さで覚えた

ふるさとをあばかれ

縊死した友がいた

ふるさとを告白し

許婚者に去られた友がいた

吾子よ

お前には

胸はつてふるさとを名のらせたい

瞳をあげ 何のためらいもなく

“これが私のふるさとです”と名のらせたい

(詩集「部落」一五本目の指を一より)

こんな詩を著わすことのできる人が存在することがたまらなくうれしかったことを覚えてい。そして、その詩を手帳に記し、自らを励まし続けた学生時代があった。その頃「ふるさと」の詩は私自身の心の支えであったが、私自身の生き方にはなっていなかった。

教師となった3年目、丸岡さんの著書詩集「部落」の中にある「意識の芽ばえ」という作品に出会う。これはまさしく自分のことだと思った。そして、そのとき手に入れた丸岡さんの講演のテープ（その講演が本資料「同和教育への希い」である）を繰り返し繰り返し自分の心に刻みつけるように聞き続けた。うれしかった、このような人が存在することがうれしくてたまらなかった。心の底から勇気がわいてきた。部落差別には絶対に負けないと思った。

その講演テープ、すなわち丸岡さんの生き方との出会いが、私が私のすべてをぶつけて取り組む同和教育のスタートとなっている。そして、その年の8月、60数年前全国水平社の創立大

会が開かれた京都（岡崎）において私は佐藤文彦先生に丸岡さんを紹介していただいた。「丸岡です。（同和教育）頑張ってください」という丸岡さんの声、そのときの丸岡さんの姿は、今も私の心の中で私自身の生き方を励ましてくれる。

私の心の支えであった丸岡さんの講演テープをその年、佐藤文彦先生が原稿にされた。その講演記録「同和教育への希い」を私の掛け替えのない仲間である板野中学校の生徒と共に学んでいきたいと思った。

丸岡さんの生き方を学ぶことを通して、対象地区の生徒たちにどんな荆の道が待っているかが人間を尊敬し、親たちの生きざま、部落の先人の生きざまを誇りとして生き抜く力を育てていきたい。また、対象地区外の生徒たちには、この学習を通して部落の仲間の悲しみ苦しみを自分の胸の痛みとしてとらえ、差別解消に向けて生き抜く力を育てていきたい。丸岡さんの生き方を学ぶことは、対象地区の生徒にとっても、対象地区外の生徒にとっても、人間としての誇りうる生き方を求めることだと思う。

丸岡さんが、気高く、清く、高らかに唱い上げた《ふるさと》の詩をはじめとする数々の詩に寄せて、人間として美しく生きるとはどういうことか、誇りうる生き方とはどういうことかを考えさせたい。

自らを誇り人間として生き抜くことは、苦しく、険しい、まさに荆の道である。しかし、その生き方こそ、人間として真実を貫いた誇りうる生き方であることを、丸岡さんの生きざまからとらえさせたいと願い本主題を設定した。

③ ねらい

《ふるさと》高州の厳しい差別の現実には憤りを持たせ、「かくす」ことから「名のる」ことへと自己を変革した丸岡さんの誇りうる生き方に共感させながら、美しく生きることを意味を考えさせ、解放の主体者を育てる。

④ 視点 集団と連帯

⑤ 指導計画

- (1) 常時指導 朝の学級会活動、帰りの学級会活動を教育活動の中心に据えた、すべての教育活動の中で人間の生き方や生きることを追求する営みを大切に、毎日の生活ノートの営みを核として、日々人間の生き方を語り合い、学級目標である「美しさを求めて生きる人生」を合言葉に共感と連帯の絆に支えられた学級集団をつくる。

(2) 関連的指導 道徳「峠」

進路決定の瞬間を1年後に控えた中学3年、生徒一人一人の中にはさまざまな不安が胸にわきおこっている。この1年、人間としてどのように生きていくか、人間としてのあるべき姿を考えながら、主体的な生き方を自覚させるために、詩「峠」を一人一人の胸に刻みつける。

- (3) 核心的指導 第一次 道徳「自分以下を求める心」……………2時間

第二次 道徳「同和教育への希い」…………… 6時間(5/6)

(4) 発展としての関連

特活「すばらしい生き方に学ぶ」

同和問題学習の中で生徒一人一人がつかみ取ったもの、学び得たものをクラス全体で語り合い、人間としてよりすばらしい生き方とは何か、私たちが求めていかなければならないことは何かを確認し、生徒一人一人の部落差別解消に取り組もうとする実践力を育てる。

(5) 常時指導（発展）

仲間の幸せの中に自らの幸せを見出し、仲間の悲しみをみんなで幸せに変えていこうとする共感と連帯の絆を土台とし、人間を大切にする、人間を尊敬する教育をよりいっそう推進していく。部落差別の悲しみは人間の悲しみなんだという視点に立ち、家庭・地域社会において部落差別解消に取り組む態度と一切の差別を許さない生き方をすべての生徒の中に育てる教育を実践していく。

⑥ 本時の指導

(1) 目 標

差別の現実から学ぶことにより、憤りを持たせ、誇りうる丸岡さんの生き方に共感させ、差別解消に向けて主体的に取り組む強い意志と連帯感を育てる。

(2) 展 開

学習活動	主な発問と期待する生徒の反応	指導上の留意点
1「同和教育への希い」を読んでわかったことや思ったことを話し合う。	○ 部落問題を学ぶことによって、かつて部落に生まれたことを恥ずかしいと思っていたことが、恥ずかしいと思うようになった丸岡さんについて話し合う。 ・ 部落問題に対する学習をしっかりとしていく中で本当のことがわかってきたから。 ・ 逃げていた自分から前向きに生きようとする自分へと変わっていった。 ・ 自分も以前は恥ずかしいと思っていた。でも友だちと学習していく中で、だんだん恥ずかしさがなくなってきた。 ○ 部落の子が非行に走り、手に負えなく	・ 真実を知った部落問題の学習によって丸岡さんが変わっていったことをわからせる。 ・ 歎くより怒ることなんだという丸岡さんの心の中にわきおこってきた怒りが、丸岡さんを変容させていくエネルギーになっていることに気づかせる ・ 差別が貧困を生み、差別

学習活動	主な発問と期待する生徒の反応	指導上の留意点
	なった、そのときにその子どもの裏側まで知って、その子どもの身になって考えていかなければならないということについて話し合う。 ・目に見える部分だけで人をきめつけるだけでなく、共にその重荷を背負っていかうとする人間になりたい。 ・目に見える表面的な部分でしか人を見ていないことが差別を残してきた。 ・部落差別の悲しみ苦しみの中で喘ぐ人たちの奥にあるものを知り、その奥にあるものを語っていけるような生き方をつかんでいきたい。 ・どんな状況にあっても人間は、差別に負けず前向きに誠実に生き続け、その間違いを訴えていくことのできる人間にならなければならないと思う。 ○ 信じ合い何でも話し合える仲間をつくっていかなければならないという丸岡さんの思いについて話し合う。 ・本当の仲間をつくっていくことが、私たちすべての幸せになっていく。 ・信頼される人間となっていくために、被差別の立場に立つ仲間の悲しみを自分の悲しみとして生きていきたい。 ・この授業を通してもっともつと訴えて仲間の輪を広げていきたい。 ・信じることは厳しくつらいことであるけど、信じることはとても強い力となっていくと思う。 ・訴える中から本当の仲間はでき、道は開	がさまざまな厳しい状況を生んできたということをはっきりとさせる。 ・目に見える部分にだけ物ごとをとらえていくのではなく、目に見えてこない、その奥に流れるものをしっかりと受けとめていくことが、すべての人間に問われているということに気づかせる。 ・磯村さん、磯永さんや真原という仲間を得てありつたものの、書けるようになった丸岡さんの姿を通して考えさせる。 ・一緒になって悲しみ、一緒になって腹を立てる中から信頼は生まれていくことをとらえさせる。 ・信じ合える仲間をつくっていくために自分はどうな生き方をしなければならぬかをとらえさせる

学習活動	主な発問と期待する生徒の反応	指導上の留意点
2 丸岡さんの生き方を学び、同和問題にかかわる生き方を考える。	かれていくと思う。 ○ 本当の民主的な世の中とは、誰もが生きてきてよかったと思える世の中でありそんな世の中をつくることが私たちの生きることの意味だという丸岡さんについて話し合う。 ・ 部落差別をなくしていくということは、一切の差別をなくしていくことだ。 ・ 弱い立場にある人たちを大切にすることがみんなの幸せにつながっていく。 ・ すべての人間には生まれてきた意味がある。私たちは私たちの先に生きた丸岡さんたちの生き方を受け継いでいき、部落差別をなくしていくということが私たちの生きることの意味だ。 ○ 丸岡さんの生き方を学んで思うこと、自分にとって丸岡さんとは何かを話し合う。 ・ 私が人間として生き抜くエネルギー。 ・ 部落差別を許さないという生き方のエネルギーであり、その源となるもの。 ・ 自分自身を励まし続けるもの。 ・ 人間としての本当の生き方を学ぶことができた。	・ 弱い立場の人々を大切に守り抜くことが憲法思想であり、民主主義の思想であることをわからせる。 ・ 人権とは人間が築きあげてきた文化であり、差別はその文化への反逆であることをわからせる。 ・ 人権の意味、「人権とは自分自身を大切に守る権利、他人の尊厳を力強く守り抜く権利」を確認する。 ・ 部落問題にかかわってどのように生きるのかという自分自身の生き方を語る。 ・ 自分にとって同和問題の学習が何であるかを考えさせる。

(2) 【授業記録】

1991年度板野郡同和教育研究大会（公開授業）

主 題 「誇りうる生き方を求めて」

1991年6月25日（火）

資料「同和教育への希い」丸岡忠雄

板野中学校3年B組

T₁ : 丸岡さんの資料をみんなで勉強してきたわけですけど、今日は丸岡さんの生きざま、生き方に寄せるみんなの思いを語り合いながら、私たちの生き方、あり方を考えていきたいと思います。非常に蒸し暑い中ですけど、みんなの思いがふくらんでいく1時間にしたいと思います。

T₂ : 丸岡さんは部落問題を学ぶことによって、「かつて部落に生まれたことを恥ずかしいと思っていた。そのことが恥ずかしいと思うようになった」と言われています。その丸岡さんの思いについて、みんながこの学習の中から思うことを発表してもらいたいと思います。

SN（女）：部落がどのような理由でできたのか。今までどうして差別され続けているのか。しっかりと学習する機会がなかったからだと思います。私たちは今、学校で部落差別について学習しているけど、昔は学習する雰囲気でなかったからだと思います。

MM（男）：丸岡さんが部落に生まれたことを恥ずかしいと思ったのは、やはりまわりに負けてしまいそうな差別があったからだと思います。部落問題を学ぶことによって丸岡さんは本当の自分の生き方というものを見つけ出すことができ、恥ずかしいと思うことが恥ずかしいことだと、丸岡さんは気づいて、自分の間違いを正していくことができる人になったからすばらしいと思います。

YI（女）：私はどうして部落に生まれてことが恥ずかしいのかわからないんですけど、やはり差別があるから恥ずかしいと思い込まされているんだと思うんです。もしかしたら、私も板野に生まれたことが恥ずかしいと思うようになるかもしれないけど、板野には、私を一生懸命育ててくれたおじいちゃんやおばあちゃんがいて、一生懸命頑張ってくれているおじさんやおばさんのいることを忘れないように、今この勉強を真剣に進めていきたいと思います。

T₃ : 今、3人が語ってくれたけど、付け加えて発表してください。

HI（男）やっぱりまわりの環境が、部落に生まれたことを恥ずかしいように思わせていたんだと思います。それで、親とかも仕方なしに子どもの幸せを願うならという感じで恥ずかしいことだから、世間に出さないように、かくすように教えていったんだと思います。

T₄ : 差別が恥ずかしいと思わせていったということ。

SE（女）：部落の人たちはまわりの環境によって、部落は恥ずかしいという感じを植え付けられていったんだと思います。それで、結局、差別はいけないとわかってても、部落を恥ずかしいと思うことは、自分に差別心があるということだと思うから、差別がいけないということがわかって、差別心を持っている自分に気づいて、恥ずかしがるのが恥ずかしいことだと思うようになったんだと思います。

T₅ : 自分自身の中に差別心があったという発言についてどうだろうか。

Y O (男) : 部落に生まれたことが恥ずかしいって思うようにしていったのは、まわりの人だと思います。小さい頃はそんなことを知らなかったし、そんな恥ずかしいという思いはなかったのだから、まわりの人によってそう思わされてきたと思います。

Y I (女) : 私もS Eさんが言ったように、自分が部落に生まれたことを恥ずかしいと思うのは、自分の差別心があるということで、部落ということを侮辱しているから恥ずかしいと思うんだと思いました。

T 。 : 今のS Eさん、Y Iさんの発言についてどう思いますか。

S N (女) : 私も同じような意見なんだけど、自分が部落出身と聞いた時や部落出身でないと聞いた時に、ほっとしたりすごく悲しくなったりするのは、やはり自分の中に差別心があるからだと思います。安心するのはやはり差別心があって、もし自分が部落だったと考え、悲しみを背負った人の立場に立つことができないことだと思います。また、悲しくなって涙が出てくるのは、自分が差別するのはいけないと頭でわかっているけど、そのようになってしまふのは、やはり差別心があるからだと思います。

MM (男) : S Nさんの意見について同じみたいだけど付け加えます。部落と聞いてなんか重苦しくなるのは、いくら勉強してもあるし、やはりその時は差別心がむき出しになっているようにぼくは思います。今までに何度か学習してきたけど、真剣に取り組んでいるというのは中学校2年になってからで、真剣に取り組むことによって、部落に生まれたということが恥ずかしいことではないんだと学習によって段々とわかってきました。最初、部落に生まれ



たということがわかったとき、大きなショックがあつて、そのショックが自分の中にある差別心からきていると今までの学習の中からわかってきたけど、まだまだ自分の中から差別心が出てくることがあると思います。

Y I (女) : それじゃあ、MM君は今、自分をどう思っているんですか。

MM (男) : 今はやっぱりまわりに仲間がいるし、本音で打ち明けることのできる仲間をつくっていきたく思っているから、自分をさらけ出すことによってもっともっと仲間を増やしていくことができると信じています。

T 。 : MM君の意見についてどうだろうか。

T F (男) : MM君は自分の考えをさらけ出して、友だちとかが変わった目で見たらどうしますか。

MM (男) : その時は実際に変わったようでも、本当のことを語っていくことによって、日がたつにつれてより深い仲間というものができてきたように、今は思えるようになってきました。

Y I (女) : T F君に言いたいんだけど、本当のことを言ってみる目が変わる友だちはそれまでだし、本当のことをわかろうとしてくれる人でなければ友だちとは言えないと思うし、本当の友だちをつくるためにも、自分が部落出身であることを言ってしまった方が、私はいいと思います。

MM (男) : T F君にぼくが公開授業で部落出身と言った時に、友だちの目が変わったような気がするのと相談したことがあったんだけど、そのことを気にかけてくれていると思うんです。その時は変わったような気がしたし、実際にも変わったように思うんだけど、今は段々その友だちとも、心をわかり合うことができるようになってきたと思うんです。やっぱり自分をさらけ出したら、相手の心も開いてくれると思うし、今は心のつかえがなくなって、みんなに部落出身であることを言ってみようと思います。

T F (男) : MM君からまわりの目が変わったように思うと聞いた時には、ぼくもびつくりしたし、まさかMM君みたいに堂々と語れる子が、気にしているとは思ってもいなかったし、こんなに部落問題の勉強をしてきたのになんでかなあと思ったんです。まじめに頑張っているけど不安になる子ができるし、丸岡さんたちのようにみんなが「恥ずかしがることではない」という思いをしつかりつかんでいかなきゃいけないかなと思います。

T 。 : T F君やMM君の思いに寄せて語ってみてください。

S E (女) : MM君の意見について何だけど、自分が部落出身だと言って差別するような仲間だったら、前も言ったけど、結局そんな友だちだったら、最初からつくらん方がいいと思います。部落と言っても、同じように頑張ってくれたり、仲よくしていくことのできる友だちをつくるのが大切だと思います。私は本当のことを言ってみて離れていく友だちを10人つくるよりかは、本当の思いがわかり合える友だちが一人いた方がすばらしいと思います。

S N (女) : MM君が部落に生まれたことを訴えることができたのは、やっぱり信頼できる人がいたからちゃんと言えたんだと思いました。それなのに、部落だと聞いて、どうしてもその人を見方が変わる人は、その人に勉強不足のところがあつたり、差別心もあつたと思うけど、その人もその人なりに自分の中にある差別心とたたかっていたのではないだろうかなと思いました。

T 。 : 次のところを考えていきます。「部落の子が非行に走る、手におえなくなる。その時にその子の裏側、差別の中に置かれている差別の実態を知って、その子の身になって考えていかなければならない」と丸岡さんは資料の中で訴えています。丸岡さんが部落問題の学習の中から、子どもの裏側、差別の実態まで、その身になって考えていかなければならないと感じていったことについて、みんなの思いを発表してみてください。

K H (男) : 差別のこと、部落に生まれたことなど、友だちの一番つらい部分を言ってくれる。ぼくはそんな友だちと本当の友だちになりたいと思います。口先だけでなく、その苦しみを

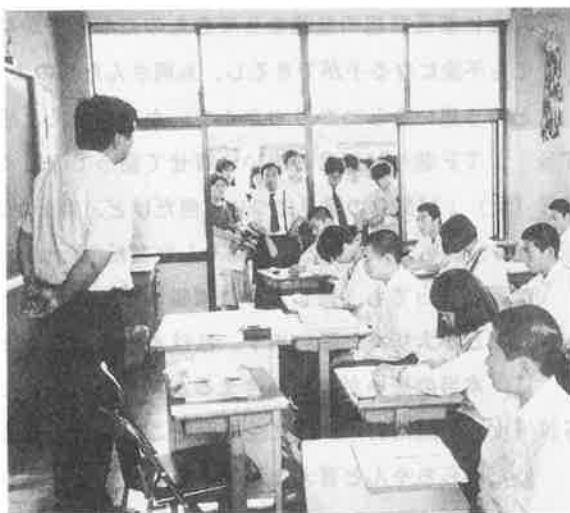
自分のことのように感じていくことのできる仲間になっていかなければならないと思います。

MM (男) : 今まで学習してきた資料の中にあったと思うけど、地区外の子が悪いことをして非行に走っても、その子やその家だけの問題になっていくけど、部落の人が一人悪いことをしたら、部落全体を差別していくような社会があると思うんです。それは社会全体にまだまだ部落問題の学習が十分でないからそうなると思うんです。実際にぼく自身もこの学習に真剣に取り組み出したのは中学2年からだけど、差別する人には以前のぼくたちと同じように本当の学習がなされていないから平気で人を差別していく人間になってしまっていると思うんです。ぼくはしっかりとした部落問題の学習をしていくことによって、自分自身の中にある差別心が段々と見えてきて正していくことができるようになるけど、しっかりとした学習がなかったら、自分の差別心は段々と大きくなっていくと思います。

Y I (女) : 私も非行に走る裏側までわかっていくことが必要だと思います。表面で説教するのは簡単だけど、そこからは何も生まれてこないように思います。だけど、今の私の本当の気持ちは、どうして部落に生まれたということだけで、非行に走っていくのかはちょっとわかりません。やっぱりそんな考え方はあかんのだろうけど、自分の本音を言ってみました。

SN (女) : MM君の話にもどるんだけど、

私も、MM君が言ったように、部落外の人が悪いことをしても、その子一人だけが悪いというんだけど、部落の中のだれか一人が悪いことをしたら、ああやっぱり部落は悪いという感じで、部落全員を悪いというように見てしまうことがあると思います。部落にも、部落外の人にも、どちらにもいい人がいて一生懸命頑張っている人がいるのに、どうしてそんな見方しかできないんだろうかなあって、すごく



恥ずかしくなることがあるんだけど、この勉強をしていくうちにこんな考え方は間違っているなあということがわかって、前までは部落差別はなくならんと思っていたけど、みんなでこの授業に頑張っていくうちになくなるんだという気持ちに変わってきました。

H I (男) : さっきから気持ちがごちゃごちゃになって、何を言ったらいいのかわからないところがあるんだけど、やっぱり非行に走る子は意志が弱かったんだと思います。差別と共に闘っていく友だちがいなくて、負けてしまったところもあると思うけど、差別に負けて非行に走るとするのは、自分が部落出身だということで涙を流すということにつながっていると思います。

SN (女) : この勉強をし始めて、家族でもよく話し合うようになったんだけど、部落の子が非

行に走るということを前に家族で話し合った時に、部落の子が自分が部落とわかった時に3通りの道があるということをおとうさんが言ったんです。3通りの道というのは、一つは部落ということをずっとかくし通して、いつばれるかわからないという感じでひやひやしなから生きていく道と、それともうどうなってもいいわという感じで開き直って悪いことをしたりする道と、もう一つが、差別は間違っているということを訴えて部落解放に向けて生きていく道の3通りに別れると言ったけど、部落解放に向けて一生懸命取り組んでいく人の方がすばらしいなあと思います。

Y I (女) : 私もSNさんと同じ意見で、部落に生まれたということをつらがるんでなくて、反対にそのことをバネとして差別されるということに怒って頑張っていかなあかんと思います。

MM (男) : だけど、実際に学習したからわかってきたようなもので学習がなかったら、自分も部落解放の道には進まなかったと思います。

Y I (女) : そしたら、MM君は悪いことをするんですか。悪いことをしたらその分だけ、部落が悪いように見られるのと違うんですか。

SN (女) : 二人の言いたいことすごいわかるんだけど、やっぱりMM君が言うように学習がいると思うんです。私もこの学習がなかったら、間違った考え方でずっといたかもしれないし、部落の人が悪いことをすれば、また部落じゃという感じでどんどん差別されていくというのはわかるけど、私たちが今、一生懸命勉強していろんな人に授業なんかを見にきてもらって、見に来た人たちに私たちの気持ちを訴えることによって、見に来た人たちが家に帰っている話をして、どんどん私たちの気持ちが広がっていけば差別はなくなると思います。

MM (男) : さっきSNさんが3通りの意見を言っていたけど、今、自分が進んでいるのは部落解放への道だと思うけど、もし学習がなかったら、まあぼくは非行の道へはいかなかったとは思うけど、かくし通していたと思います。

T₁₀ : 丸岡さんもそうでなかったでしょうか。丸岡さんがふるさとの詩を書き、またさまざまな部落を語る、差別をなくすための詩を書くようになった。それは差別をなくすための学習があったからだと言う。そして、信じ合い、何でも話し合える仲間がいたから、堂々と差別解消に向けて自分をぶつけていくことができたと言われる。信じ合い、何でも話し合える仲間、これはみんなを見ていてしみじみ思うことです。この丸岡さんの思いに寄せてみんなが思うこと、感じることを語り合いましょう。

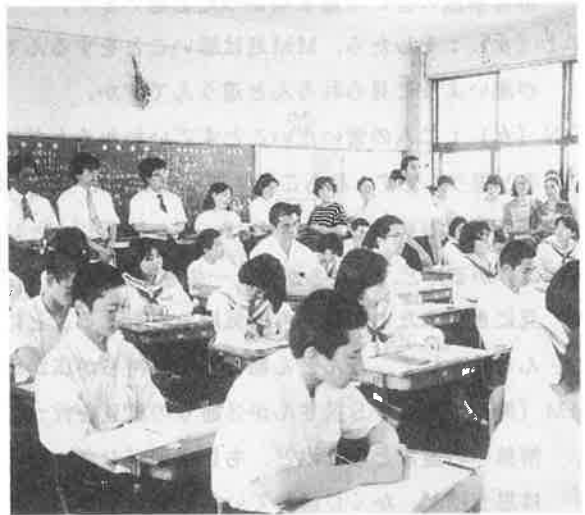
J K (女) : 私は3年生になるまでは、自分が部落出身であることを絶対かくしていこうと思っていました。でも、いろいろな資料を勉強し、みんなの意見を聞いて、その言っていることを本当だと信じたとき、この仲間だったら私の一番つらい思いを打ち明けることができると思うようになってきました。今、私は二人の友だちに自分が部落出身だということを打ち明けています。まだ二人しか本当の友だちはいないけど、これからはもっとたくさんの本当の仲間を増やしていきたいです。

T₁₁ : J Kさんの思いを受けとめてほしいと思う。

Y I (女) : 私も J K さんにそのことを打ち明けてもらったんだけど、自分の一番苦しい部分を打ち明けてくれたんだから、私も心を開いて頑張っていかないかんと思うようになってきました。今、まだ二人にしか言えなかったかもしれないけど、もっとクラスの中の人たちが J K さんの気持ちを受けとめて、みんな今の時間を大切にしてほしいと思います。

MS (女) : 今、3 年生でも、何人かの人、自分が部落出身ということを全体学習なんかで言ったんだけど、今、J K さんが二人だけと言ったけど、ここにいる 3 B のみんなの前や多くの先生方の前で言えたんだから、信じてくれたと思います。私も部落に生まれたんだけど、恥ずかしいと思ったこと一度も……なかったけど……ほなけど言うて差別されたいやじやと思うてずっと言えなかったけど、このクラスの子だったら、信じてくれるからこのことが言える。

SE (女) : J K さんと MS さんが言ってくれたけど、これから今日打ち明けたことを後悔するようだったら、私やはいったい今まで何をしてきたんと思ってきていいと思います。私も部落ということを言うた子を変な目で見ようなんて一つも思うてないし、見たらごっつい自分があほらしいなってくると思います。それで、この前読んだ本で心に残っていることなんだけど、一様世間で言う親友とは、親しい友と書いて何でも話し合える友だちということだけど、本当の親友とは、心の友と書いて自分の恥ずかしいところでも、何から何まで端から端まで話し合える友だちを心友というそうです。私もそんな心友をたくさんつくりたいです。



TK (女) : 私も部落出身ですが、このクラスのみんなだったらこのことが言えると思います。この前友だちに自分が部落出身ということを打ち明けたら……「ほんなん関係ないでえ」と言ってくれました……。私は本当の友だちがいたんだということがわかったのでよかったなあと思いました。

KK (女) : 私はさっき TK さんの学習プリントを見せてもらったんだけど、最初見せてと言ったとき、いやじやと言っていたけど、KK さんだったら信頼できるけんていうて見せてくれたんです。私やが信頼できる友だちになっていかないかんと思います。

T₁₂ : みんな二人の発言をどう聞いたですか。

MO (女) : 私も TK さんに打ち明けてもらったんだけど……。

T₁₅ : TK さんの分もがんばらな。

MO（女）：信頼してくれていると言ってくれたんだけど、まだまだ力になれていない……。もつと勉強して、TKさんの力になっていくことのできる人間になりたいです。

KU（男）：まだ発表もできないですつと座っているだけなのに、みんな信じてくれて発表してくれるのに、自分はこんなことしよっていいんだろうか。このクラスの子を信じて発表してくれるのにこんなことしよっていいのかと思いました。

SN（女）：私はちょっと前に、まだこの勉強をし始めて少ししかたっていない時に、ある友だちから部落出身じゃということを打ち明けられて、なんとなくわかつとつたんだけど、本人から聞いてその子泣いていたし、ショックだつて、夜とかあまり眠れなかつたんだけど、そのことを打ち明けて涙を流している子を見たら、腹が立ってきてこういうふうはその子をここまで追いやる差別を許せないと思います。

KT（女）：私も部落出身ですけど、泣いている子を見たら泣いてほしくありません。そして、その泣いている外側だけ見てほしくありません。悲しみが深いから涙が出てきて止まらないんだけど、この悲しみや苦しみがわかっている友だちがこのクラスにいっぱいいるし……。本当は今、泣きたいんだけど、涙をこらえています。

MM（男）：やっぱり自分から心を開くことによって友だちも心開いてくれるということが、今、本当にわかってきたと思います。心を開くことにより信じ合う友ができ、お互いに本音で思いをぶつけ合うことができると思います。お互いに涙が出るというのは、涙を流す友だちの気持ちはわからないことはないけど、これからの学習によって涙は出てこなくなると思います。実際にほくもこのクラスでは、信頼している友はたくさんいるし、全体的にも友だ



ちはたくさんいる方だったけど、表面的な友だちがほとんどで本当に信じ合った友だちはあまりいなかったと思うんです。でも、この学習によって、信じ合える友だちがほく自身の中で増えていったと思います。自分から心を開くことによって、まわりの人も心を開いてくれたことが本当にうれしいです。心開いてもまわりに反応がないんだつたら、少しもおもしろくないと思います。この頃、公開授業や全体学習のある場面で口先だけでいい意見を言つたつて、公開授業や全体学習の別の場面で寝ていたりする子が目に入つたら、とても腹が立ってめつたに怒らんつもりなんだけど、自分でも押さえきれんぐらい腹が立つ時があるんです。でも、押さえないかんと思つて押さええています。みんな頑張つてほしいと思います。

HI（男）：ほくも部落の人間です。今までこのクラスにもそのことをわかってくれる友だちは

いないと思っていただけ、「みんないいなあ」と思いました。森口先生に家庭訪問の時に「お前は部落の人間だ」と言われたとき、自分には差別心がないと思っていただけ、実際にありました。それで、この授業では泣かないと思っていただけ泣いてしまいました。これからこれをバネとして部落解放の道に進んでいって、気軽に部落の人間と言えるような社会をつくっていききたいです。

SE (女) : みんな泣きながら語ってくれているのに、涙が出てこん自分に腹が立つんだけど、心の中は泣きたい気持ちでいっぱいです。話は最初にもどるけど、MOさんがさっきTKさんの力になれないと言ったけど、みんな部落出身だと打ち明けた後も、いつも通り接していくことじたいが、その子の力になって一緒に闘っている証拠だと思います。

YI (女) : 私もMOさんの意見についてだけど、私も、MOさんはTKさんの力になれていないと言っていたけど、ここで手を挙げて発表することがその人を支えていくことなんだと思います。今日一度も発表していない人がいると思うけど、ここで座ってお客さんのまま終わったら、みんながこうやって心を開いてくれているのに、その人の気持ちを踏みにじることになっていくと思います。絶対一度は発表してどんなことでもいいけど、その人の思いに応えてください。

KO (女) : みんなの前で涙を流して発表している子を見ていたら、涙を出したいんだけど、心の中で泣いているけど、涙が出てこないという感じです。授業を今のうちにやっておかなければ、その人たちを自殺に追いやるかもしれないから、今のうちにみんな心を開いて、この学習を頑張っていかなければいけないと思いました。

MM (男) : ぼく自身、あまり人の涙を見るのはいやなんだけど、人の涙によって、自分の心の中になんか突き刺さっていった。これからの発表とかのエネルギーになるものがいっぱい生まれているように思います。涙を流してまで言ってくれるのはうれしいくて、ぼく自身も泣きたい気持ちになっているし、みんなも涙を流して語ってくれる仲間の思いが心の中に突き刺さっていると思うから、どんなことでもいいから、まわりの人に、その思いをどう受けとめたか発表してもらいたいと思います。

SN (女) : みんなこんなに一生懸命になって発表しているのに、どうして下を向いていられるのかと思います。信頼されているんだから、何か言いたいという気持ちはみんなあるんだと思うけど、信頼してくれている人に何でもいいから応えてほしいです。

MT (男) : みんながぼくらのことを信じて真剣に発表してくれるのに、ぼくはその思いにあまり応えられていないので、これからは手を挙げて堂々と発表できるように頑張りたいと思います。

KK (女) : YIさんやSNさんの意見に付け足すようになると思うんだけど、一回も発表していない人は、みんなが泣きながら訴えているのに何も感じないんですか。何か思っているんだしたら、手を挙げて発表してください。

RH (男) : ぼくは親から部落のことを聞かされて、中学校に入る前は部落というのがすごく恐

かったんだけど、中学校に入って部落の友だちができたんだけど、みんないいやつばかりで、ほんまに部落差別を壊さないかなあと思いました。

K M (男) : ぼくは今までほとんど自分のことばかり考えていて、友だちが部落だといってもあまり真剣に考えていませんでした。今日の授業でもみんな泣きながら自分のことをどんどん言っているのに、支えることのできない自分がすごく情けないです。今回の発表をバネとして、みんなに応えられる人間になるように、これからの授業でどんどん発表して信頼し合える仲間をつくりたいと思います。

H M (男) : 今まで発表してくれた子は、ぼくや他の子を信じて発表してくれたのに、今までぼくは心が重苦しくなって発表できなかったのも、この授業を土台として部落差別を壊して重苦しくない社会をつくっていく一人になりたいと思います。

M I (女) : 今まで自分のことを打ち明けてくれた人に対して、ずっと私はうつむいてばかりいたんだけど、今まで学習してきて本当に自分自身の心から自分の一番つらいことを言えるのは、まわりが信頼できるということで、S Nさんがさっき言っていたけど、みんな信頼されていると言ってくれて、私も信頼されているのかなあとと思って、だけどどんどん発表できないというのは、自分の心の中にまだまだ差別心があるからだと思います。これからもこの差別心と闘って発表していきたいと思います。

S F (女) : 私もあまり人の涙は見たくないんだけど、私だって、中一のときは泣きたかったし、今までだって我慢してきたし……、差別っていうのはつらいから……、中一のときに味わった思いはもう二度と味わいたくない。差別に苦しむ人の姿も見たくない。みんながそんな苦しみを味わうことのないように頑張って勉強していきたいと思います。

K N (男) : みんなは信頼してくれているけど、ぼくにはまだ信頼される程の力はないと思います。みんなに信頼されている限りは、みんなの期待を裏切らないように差別をなくすために頑張りたいです。

T₁₄ : 時間がきました。最後に委員長まとめてくれるか。丸岡さんとは、みんなにとって何であるのか。丸岡さんの生きざま、生き方を学習してきたことは何であったのか。

Y I (女) : 先生にとって丸岡さんとか、みんなにとって丸岡さんとかは、すごい人かもしれないけど、私にとって丸岡さんというのはただのおじさんです。私の丸岡さんは、みんなであり、先生であり、みんなの丸岡さんは、みんなであり、先生であり、みんなが悲しむことにより私も悲しくなり、みんなが頑張ることにより、私も頑張らないかんと思う。私の一番中心はみんなです。この勉強をするにあたって絶対みんなを泣かしたくないと思います。みんなが笑ってちゃんとやっていけるようになるまで、ほんまにみんなで頑張っていかなあかんと思います。みんな頑張りました。

T₁₅ : 終わります。

(3) 【板野郡同和教育研究大会公開授業を終えて】

《教育記録（週録）より》

板野郡同和教育研究大会公開授業、私の中にまだまだ残っていた思い、「中学生はしゃべらない。」「中学3年生にもなったらなおさらだ。」という意識を大きく変えた。「先生、50分は短過ぎますよ。その言葉に生徒たちの成長を見る。中学生はすごい。そうつくづく思う。そして、何より共に学んでくれる3年生の先生方に感謝したい。そんな気持ちで板野郡同和教育研究大会の一日は流れた。すごい生徒、すごい先生と出会えた。こんな年はそうないだろう。今を大切に、今を精一杯に生きたい。感謝の中で……。

《翌日の生活ノートより》

〈歎くより怒ることだ〉

（生徒TK）

私は今日の発言で部落のことが恥ずかしくなりました。もう何のこだわりもありません。言っている時は自分で何を言っているのかわからず、涙が出てきたけれど、MSさんやJKさんが発言したのに、私だけ黙つとつてもいけないなあと思っていたんです。そしたら自然と手が拳がったのが不思議でした。心臓はドッキンドッキンと破裂しそうだったけど。私の発言の後、KKさん、MOさんたちが言ってくれて、ほっとして言ってよかったなあと思いました。泣くのは今日で終わりにします。MM君とか、KTさんとかも他人の涙は見たくないと言っていたし。今日の授業で私は多くの人に支えられているなあと実感しました。みんな信じ合える仲間です。板野に生まれたこと、部落に生まれたこと、まだまだ不安とかがあるけど、私は強い人間になりたいです。『歎くより怒ることだ』を胸にきざんで。今日で新しい道が開けたような気がします。今まで『学習会の通知やもらいたあない』と歎いていた自分がばかしくなりました。これからも学習会に参加していきたいし、どんどん学習していきたいです。いつか絶対絶対差別がなくなっていると思います。何か、楽しみです。とにかく、今日の授業、忘れられない一日になりそうです。うれしかった。よかった。ビデオ貸してください。

〈もつともつと話のできる友だちを増やしていきたい〉

（生徒HI）

今日一つの変革が起こったようだった。今日の授業で、どうして丸岡さんがこんなに訴え続けてきたのか、それを僕らがどう受け止めるかが見えてきたような気がします。今までMM君一人にたたかわせているようなものだったけど、今日の授業は自分にとつても助つ人みになったし、本当に仲間になれたと思う。今日が出発のようなものです。これからの航海をどうしていくか。これからもつともつと話のできる友だちを増やしていきたいと思う。今日、僕は泣いてしまった。泣こうと思っていなかったのに涙がこぼれた。家庭訪問の時は目に涙を浮かべたけど流すことはなかった。家庭訪問の時の涙は、心の奥底に差別心があってでてきた涙だったかもしれないけど、今日の涙は違う別のものだと思います。

〈今日をステップにまた頑張っていきたい〉

(生徒SE)

今日の授業、いつもの雰囲気火をつけたのがJKさんだったように思う。「私は部落出身ですが……」その言葉にはじかれたみたいにMSさんたちが自分のことを打ち明けていった。そして、正直言ってHI君の涙には驚いた。今まで忘れかけていた人間の本質を思い起こさせてくれた涙だった。今日何人もの人が部落出身であることを打ち明けた。聞いたとき「ふーん、あの子も部落出身なんかー」そう思っただけでそれ以上は何も感じず、打ち明けてくれたうれしさのようなものがあつた。今日言った子は私たちを信じて言ってくれた。これからこの問題でくじけかけたとき、「私は信頼されているんだ」と思つて頑張っていこうと思う。今日の授業を終えて私が3Bのみんなに言いたかったことは「ありがとう！」だった。私を信じてくれた人たちへのありがとうの気持ちだし、こんな最高の授業をしてくれたみんなへのありがとうの気持ちがあつた。そして、今の私を形成してくれている私へのありがとうも含まれている。絶対50分は短過ぎた。勇気を持って手を挙げたとたんに、チャイムが鳴って意見が言えなかった子を見たとき、「もったいない」と思つた。せめてあと15分ほしかつた。そしたら、もっといい授業だっただろうに……。私たちはまた大きくなった。まわりで見ていた先生たちにも何かを与えたと思う。そして、差別解消の出口に近づいた。こんな授業は二度とないかもしれないけど、今日の授業に参加できたことずっと残っていくと思う。今日をステップにまた頑張っていきたい。

〈顔から火がでるほど恥ずかしかった〉

(生徒YN)

今日の授業、涙を流して自分が部落出身だと語ってくれた友だちがいた。私は友だちが言ったとき、手を挙げるつもりでいたのに、何か友だちの存在が大き過ぎて、その友だちの言葉が思い切り、私の心の中の差別心を刺したような気がした。YIさんやKKさんが「このまま黙って下を向いているより、友だちの気持ちを受け止めて発表して」と言われたとたんすごい心の中で熱いものを感じました。こんなに涙が出る程、この授業に取り組んだのは初めてです。みんな3Bの仲間を信頼しているからこそ、泣きながら語ってくれた言葉なのに今まで下を向いてよそ事を考え、ぶつかってきてくれる友だちにそつぽを見いていた自分が今日すごく恥ずかしかった。本当に顔から火がでるほど恥ずかしかった。私は授業の終わりに2回ぐらい手を挙げただけで、チャイムが鳴って発表できなかった。でも私は、私なりに今日みんなの前で語ってくれた友だちの言葉を体全体で受け止めたつもりです。最後に私をここまで変えてくれた3Bのみんな、それから先生に何かのきっかけで巡り会えたことを感謝しています。

(4) 【資料】

同和教育の希い

丸岡 忠雄

詩『ふるさと』について

“ふるさとをかくす” ことを

父は

けもののような鋭さで覚えた

ふるさとをあばかれ

縊死した友がいた

ふるさとを告白し

許婚者に去られた友がいた

吾子よ

お前には

胸はつてふるさとを名のらせたい

瞳をあげ 何のためらいもなく

“これが私のふるさとです” と名のらせたい

昭和4年、世界中が大不況の年、山口県光市の高州、200戸ばかりの被差別部落に私は生まれた。高州は、真っ白い砂浜に緑の松原、風光明媚なところ。しかし、徳川時代から、この里に住まわされた人々は、この美しい自然とは裏腹に、大変厳しい条件のもとで生きてきた。

真っ白い砂浜では、地引き網で漁もできる。すぐ北側には美しい田圃が並んでいる。それでいて、徳川の時代には、東と西の両部落（この部落とは被差別部落ではない）では、漁船を持って漁に出ているのに、高州には一隻の舟もなかった。

私の部落は、高州（たかす）と書く。その名の通りもともと川の河口にできた州である。真っ白い砂とは、作物のできにくいところ、そこに住居がある。きれいだけど、自然環境の厳しいところに、最も不況のどん底のとき、10人兄妹の9番目に生まれた。8人、男兄弟がいて、私は七男、弟が一人いる。

厳しい条件と、貧しい生活の中で育ったけれど、昭和4年生まれだから小学校に入学したのは昭和11年。小学校時代を振り返ってみて、小学校1年から6年まで先生や友だちから、部落差別にかかわって何かいやな思いをさせられたことは、一度もなかった。例えば、「橋のない川」

（住井すえ）に出てくる孝二たちみたいな、「破戒」（島崎藤村）に出てくる話のような、そんな思いをさせられたことはない。被差別部落の生まれだということで、お前は高州だろう。いやな表現で言われた体験はない。それでは差別を受けなかったのかということそうではない。私は、

やはり厳しい差別の中にいたんだということを改めて思う。

その一つ一つを申し上げながら、差別が単に言葉で言わないから、何か特別なことをしないから、差別をしていないんだということには、ならないことをわかっていただきたい。

小学校1年生から自分が部落（被差別部落）の生まれなんて知っているはずはない。どのような時期に、どのような機会で、自分が部落の生まれであるかを知るか。それはいろいろであるが、私は小学校5年のとき、私の友人が教えてくれた。

「おい、丸岡、知つとるか。この高州というのはなあ、よそと違うんぞ。」

「よそと違うとはどういうことだ。」

「いや、おれもよく知らんけど、大人が話していた。実は、この高州はこれなんだよ。」

指4本を出して、おれたちは、これだ。だから違うんだと、指4本出して説明はしてくれたんだが、それがどういう意味なのか、その友だちも知らない。

家に帰って母に聞いてみた。

母は、小学校1年生の途中で目を患って、それがきっかけとなり、家も貧しかったため学校へ行けなかった。片仮名がやっと書けるぐらいの力しかない。母は、学問はなかったけど、私の部落では、「やり手ばあさん」なんでもできるやり手のおばさんと言われ、わからないことは、何を聞いてもきちんと教えてくれる母であった。

私は、母に指4本のことを聞いてみた。母は形相を変えた。日頃、母にあまり叱られた経験はない。その叱らない母が、指4本のことを聞いたとき、顔色を変えた。

「そんなこと言うもんじゃない。」

まるっきり違う剣幕に恐れをなして、このことは口にしてはいけないんだということはわかったけど、なぜ口にしてはいけないのかということについては全然わからない。何にもわからないけど、そのことについては言うてはいけないんだということだけがわかった。

5年生の子どもでも、そう言えば、あのことかなと、子どもなりに思い当たる節があった。なぜか理由はよくわからないが、私は高州に生まれたということが、なにかとても恥ずかしいことのように思っていた。恥ずかしいと思う内容はいろいろあった。例えば、当時貧しかったのは高州の子どもたちだけではなくだったけど、他の地区の子は貧しくても学校へだけは来た。高州の子は全く来ない。また、両親がどこか遠くへ商売に行ったきり、まったく帰って来ない家というのは、高州以外にはない。他の地区では、冬になると温泉に湯治に出かける親がいる。高州には湯治に出かける親はいないけど、5月のお祭りがすむと、両親が全部出てしまつて、子どもだけになるという家がいくらもある。私の家では、両親は家にいたけど、百姓しようにも、3反ばかりの小作で、家族全部がそれだけで食べていくことができない。したがって、百姓仕事のない時は、母は毎晩のように、草履を作っていた。そして、日中は、竹で編んだ籠を天秤で肩に担いで、2里も3里も離れたところへ、ボロ買いに出かけた。

他の地区では、貧しい友だちはいるけど、草履を作っても売るといふ家はない。どんなに貧しくてもボロ買いに行く家はない。子ども心に、母が「学校へ行つて、お母ちゃんが草履を作つて

いることを言われんよ。」という言葉が、不思議に響いて腑に落ちない。草履作りと言ったら、すぐ思い出すのが、当時修身で習っていた二宮金次郎の「柴惜り、縄ない、わらじをつくり、親の手助け、弟を世話し。」修身で習う草履作りは、孝行の手本であるのに、「どうして言ってはならないのかな。」と思った。きれいな鼻緒の竹の皮の草履、それを作って売ることがどうして恥ずかしいのかわからなかった。（それは私の母だけでなく、部落の親たちの重要な内職であった。）

また、10人兄弟の一番上の兄、親と子ほど年が違っていた。その兄のことで母は、いつも私に言い聞かせていたことがある。

「お兄ちゃんが肉屋していることを言うんじゃないよ。」

兄が刑務所にでも入っているとか、悪いことをしていることを言うなというのならわかるけど、肉屋をしていることを言うなということの意味がわからなかった。

小学校を卒業して、すぐに門司（現在の北九州市）に奉公に出て、苦勞して結婚して、宮崎県の都城で店を持たせてもらって、立派に頑張っている兄のことを言うなということの意味がわからなかった。

肉屋、靴屋などは、今でこそ、どなたでもしているが、当時は部落の人が圧倒的に多かった。

そうしたことから、なぜ言ってはいけないのかわからないまま、いけないのだという思いだけが胸の中にたまってきたような思いがする。

5年生のとき、何も教えてもらえなかったけど、その意味がわからなかったけど、何かあのことにつながっているんだということを子ども心に悟っていった。教えてくれたんじゃない。獣のような鋭さで部落は隠さなければならないこと、恥ずかしいことなんだと感じていった。

だれかが教えてくれたのではない。本能のように隠すということを感じていった。

小学校5年のとき、私を大変かわいがってくれた先生が、友だちと二人で放課後、習字を教えてくださいました。天神さまへ奉納するための習字を書くためにわざわざ残して練習させてくださいました。

その席のこと、「丸岡君、それはそれと一番上のお兄さんはどこにおるのかね。」と先生が尋ねられた。「はい、兄は宮崎の都城におります。」そして、「何をしよるんかね」と聞かれる。私は即座に「店をしています。」と答えた。先生は、そのことを調べて、記録にするために聞かれたのではない。雑談の中で他の事務をしながら、「何をしよるんかね。」と聞かれたただけなのに、母がいつも私に「肉屋をしていることを言うんじゃないよ。」と言い聞かせていた。でも、私を残して習字を教えてくださいました先生に嘘を言ってはいけないという思いがある。

先生に嘘を言ってはいけないという思いと肉屋をしていることを言ってはいけないという思い、その思いが重なり合って、先生の「何の店かね。」という問いに、「あの、食料品を売っております。」と言った覚えがある。このなんでもないこと、ごく小さいこと、一週間たつたらとつくと忘れてしまうこと、それがあの時、肉屋と言えないで食料品を売る店と言っている。誰が教えたつていうのでもないのに、どうしてあんな悲しい知恵が私についてしまったんだろう。そう思った。「そういうときはこういうもんだよ。」と兄が私に教えてくれたわけでもない。母が教えて

くれたのでもない。誰にも教えてもらってなくても、そのことずばりを言えないで子供心に懸命に考えた末が、肉屋を食料品屋と言っている。なぜそう言わなければならないのか何もわからない。子供の時、わからないということ、どうしても納得いかないこと、でも、それが中学生になり、高校、大学に行き、学問が進むようになるにつれてわかるようになる。「ああ、あれはこういうことだったのか。」「ああそうか。」というようにわかってくる。ところが部落問題だけは逆だった。知恵がつくにつれ、社会的に視野が広がるにつれてわからなくなる。どうしてそうなのか。小学生の時、小さな問題であつたはずなのだが、中学生になると、「丸岡、お前のうちはどこだ。」こう言われることがどうにも耐えがたいぐらいになった。最も嘘の通用しない相手というのは同級生だった。だからふるさとを高州だと言えよ。しかし、その嘘の通用しない相手にでも高州と言えない。私の詩の中に高州という言葉が、どんなに重たいかということを書いた詩がある。

《ふるさと》

いちばん なつかしいことば

いちばん おもたいことば

いちど

いきを ととのえたうえで

やつという

ふるさとの名

タ・カ・ス

その思いを詩に書いてみた。一度息をととのえないと出てこない、ふるさとの重さ。でも私が部落の中に住んで、そこから学校へ通っている間は、まだそれほど重たいものではなかった。本当にこれがやりきれないほど、重たいものになったのは、ふるさとを出て一人になった時である。

昭和19年、戦争も終わりに近づいていた頃だったが、神国日本は負けるはずがない。必ず勝つんだ。そういうことを信じさせられていた。その19年は、私は旧制の中学2年生だった。友人たちもたくさん少年兵として戦争に行き、予科練に入り、皆学校を出て行った。小さい体であつたが、私も兵隊になろうと思った。中学2年から受けることのできる昔の幼年学校（昔の陸軍の将校を養成する所）、軍の幹部養成としてエリート教育するための徹底した英才教育のなされた学校であり、少年たちのあこがれの的のような学校があつた。

私は光中学校一期生（光市人口5万、現在新日本製鉄、武田薬品等の工場は戦時中、海軍工廠〔弾丸・魚雷、人間魚雷回天〕のあつた所）、海軍工廠の設置に伴ってできた県立中学校の一期生であつた。19年にその幼年学校を受けて合格、熊本へ行った。約30人受けてたった一人合格した。当時の幼年学校の競争倍率は25倍から30倍であつた。

昭和57年の夏、その時の光中学校の校長先生を招いて同窓会を開いた。校長先生は覚えていてくれて「丸岡、元気か。」と声をかけてくださった。その先生の言葉に涙が出た。40年たつのに

担任でもない校長先生が会おうなり、「丸岡、元気か。」と言ってくださる。熊本の幼年学校に向かう時、「青柳の世にさきがけて咲きにけり」という句をくださったことを申し上げたら、「そうだったかな。」と笑って言われた。この句の中に初めて合格してくれたという喜びが含まれている。そんな気持ちで熊本に行った時、どんなに有頂天になっていたか。それが熊本に住んでいてしばらく生活するうちに、私を愕然とさせることがあった。熊本の街に部落がある。これは本当に驚いた。驚きというより、恐ろしくなった。私は当時の知識や考えの中で、高州のような所、私が住んでいる所、私の親戚のある所だけに部落はあると思っていた。日本中に部落があるなんて全然思いもしなかった。

部落はなぜあるのか。そのことをきちんと教えられていたら、熊本に部落があるということは、行く前からわかっていて、あたり前なのだ。そのあたり前のことが私にとって思いもかけないショックなことであった。生徒たちが日本中から集まっている。その生徒の中で、東京から来たものはあまりよく知らないけど、関西・中国・九州から来たものは部落のことについて知っている。そういうことが話題になるとしばらく話は続く。その話を聞いていると、ほめた話が全くない。軽蔑した話、恐がる話、汚いという話、悪口ばかりである。軽蔑、恐れ、嫌悪、そんな話題が出た時、私はどうしたらよいのか。「おい丸岡、お前のところはどうか。」と言われた時、返事ができない。「そんなこと言うんじゃないよ。同じ日本人で、俺がそうなんだ。」それが言えれば楽なんだが、なんでもないことなのに、でもそれが言えなかった。言えないどころかそんな話が出ると、調子を合わせてしまう。「そうやな、そうやな、うちの方にもあるが、あまり相手にせんほうがいいな。」と必死に応えている。小さな嘘でも言うものじゃない。その嘘をカバーするために、次の嘘を言ってしまう。その嘘をカバーするためにまた次の嘘を重ねる。私は部落と全く関係ない人間だというような素振り続けた。しかし、そんな話題の出る度に、なんともやりきれない、ひきむしられる思いであつた。

《高州　－わたしのふるさと－》

春には

わかものが　むらを出る

とりわけ　少し上の学校を出たものが　いくにんも出てゆく

ふるさと遠く　ひとりになると

わかもののふところでは

“ふるさと”が急にずっしり重たくなる

“部落”の話など出ると　とたん

息をつめ

ケンメイに　平気を装いながら

ひそかに　ふところをまさぐってみる

みなに調子を合わせるのだが

ふところには いつしか血がにじんでしまっていたりする

ひきむしろうにも

“たかす”は決して剥ぎとれはしない

また、「かつて」という詩に

異郷に ひとり ふるさとを 否む

それがどんなものであるか。それがどんなに重たいか。一人になって初めてわかった。でも私は光中学校の一期生だ。誰もきていない。調子を合わせていようが、私のことを言うものは誰もいない。

昭和20年の3月「おい丸岡、お前の所の光中学校の後輩が二人入ってくるぞ。」と友人が知らせてくれた。軍の学校とはいっても、なんたって子供。ふるさとが懐かしい。親元が懐かしい年頃。先輩は後輩を非常に大切に作る学校。後輩が入学してくるということは、飛び上がるほど嬉しいこと。これは誰にでもある感情。ふるさとのものが来たと聞くと、わざわざ訪ねて行ってでも、「よく来たな、お前どこから来たのか。」と懐かしがって手を握り合ってふるさとの思い出を話す。それがふるさと人なんです。ところが、私に浮かんできた思いとは、ふるさとの人に出会える飛び上がらんばかりの楽しい思いではなかった。「よわったなあ」と思った。「あのことを知っている子が来なければいいがなあ」と思った。「かつて」という詩がある。

《かつて》

故知らぬ かげにおびえ

“ふるさと”の重みに息をのみ

異郷に ひとりいて

ふるさとびととの邂逅を

わたしは蟹のように怖れた

これは私がそうした特異な感情をもって、私が思いすごして、私だけがそういうことを思うのだろうか。ふるさとの人に出会うのが怖い。そんなばかげたことを感じるのは私だけだろうか。これは後に部落問題を勉強し、多くの部落の人たちと接するようになって、いく人もの人から、この思いを聞かされて、私だけでないんだということをはっきり思い知らされた。

私には一人の弟がいる。山口県大島の商船学校を出た。今、船乗りで神戸の川崎汽船の機関長をしている。その弟に（昭和33年頃）ト短調という詩集を贈った。2、3年たって神戸にある弟のアパートに行った。机の上の本棚にト短調の詩集がたててあり、私は手に取って見ていた。見ているうちにドキッとした。アッと思った。部落の部の字も書いてない詩集の一番後ろにある奥付を見た時、ギクッとした。『著者丸岡忠雄山口県光市浅江高州』その高州の二文字は墨で塗りつぶされていた。

山口県の高州が低い州であろうと、部落だとわかる可能性がほとんどない神戸なのに、墨を塗っ

た弟の思いがわかる。かつてふるさとの人に会うのが恐かった、あの思いと同じだった。俺だけじゃないんだと思った。そんなにも重い、そんなにも辛いふるさとであるのに、なぜそうなのかということがまるでわからない。日本人でないのかもしれないと本気で思った。

昭和24年から小学校の教師になった。教師になって数ヶ月たないうちに教えていた5年生の女の子から授業が終わったすぐ後で、「先生、これ何か知つとるかね。」と言われたことがある。その子が私の顔をニヤニヤ見ながら、指を4本出して私の前に突きつけてきた。私は返事ができなかった。「あつ、先生の顔が赤くなった。」そう言いながらキャッキョ言いつつ外へ出ていった。たつたそれだけだった。子供は何の考えもなくちょっと私を試しただけだった。家で聞いたことを今度新しくきた若い先生に言ってみただけだ。

《指》

“センセ コレナンカシツチョルカネ”

目の前に四本指突き出して

女の子は僕を見てわらっていた

こおるおもいで立ちつくした 一瞬

“ヤア センセイガアカイカオニナッタ”

女の子の声を背に

かえすことばも知らず

やつと十九の僕は

こぼれそうな涙をこらえて教室を出た

僕にはあまりにはつきりわかるのだ

この子の家の団欒の席で

新任の助教のことが夕餉の食卓の話題にのぼり

大人たちが その折

どんなことを子供に教えたか

“センセ オハヨウ”

その後も 子供は何でもない無邪気な声だが

メスよりもするどく一突き僕を刺した

その子の指の

痛さは

十年経て

昨日のように鮮やかである

無邪気な行為であることはわかっている。何でもないようなことと思えるかもしれない。去年、この話をしたとき、高校3年の息子が「どうしてそれぐらいのことでショックなんかなあ。そんなことなんか笑い飛ばしておけばよいではないか。」と言う。本当にたいしたことではない。でも私はたったそれだけで教師を辞めようと思った。ダメだと思った。

こんな小さなことで、しかも無邪気にやったことがわかっていて、そのことがそんなにショックなのにとて教師はやれない。こんな弱虫じや代用教員だといっても教壇に立って人にものを教えようという身なんだ。そして自分のことなんだ。どうして部落があるのかも知らない。日本人でないのかも知れない。そういえば思い当たる節がある。戦時中、光海軍工廠建設のため一番危険な仕事をした人たちは、広島市の刑務所から来た人たちと、朝鮮から来た労働者であった。あふれるほどの朝鮮から来た人たちが、高州に住み着いている。戦時中すでに畑のできなくなった私の家にも三組の朝鮮の人がいた。皆いい人だった。日本語もわからない、若い朝鮮の婦人が片言の日本語を話せるようになって、私たちとかかわるようになった。本当にいい人たちであった。高州の人より多い朝鮮の人のことを思い浮かべて、朝鮮の人と先祖が同じなんだろうかと思ったりもした。（意識調査の結果によると、現在なお先祖が違うというのが20%ある）また、これは朝鮮の人に対する差別がいかに根強く存在し、文化的にはむしろ私たちの大先輩であるはずの人たちを、明治以後どんなに差別してきたかという一つの証でもある。

その後師範学校研究科に6ヶ月在学した中で、部落問題だけはきちんと学んでみたい。部落問題だけはきちんと知っておかないと、子供の4本指を出す行為から受けた大きなショックを、乗り越えることはできないと思った。

昭和24年その半年、歴史を教える若い東大の史学科を出たばかりの潤間という先生に出会った。貴重な出会いだとしみじみ思った。その先生との出会いがなかったら、こういう部落の詩は書いていない。こんなに胸張って部落問題とは向き合っていない。おそろくうつむいたままで、やはり部落は恥ずかしいこと、部落は隠しておくもの、そういう思いでずっと過ごしたに違いない。「どうして部落ができたのか。つくられたのか。残されたのか。明治の時代には、大正の時代には、……。」20才になって、私は生まれて初めて部落差別の本質を知った。私は真実を知って初めて目の覚める思いがした。歎くことより怒ることだ。これが後に私が、部落についての詩を書くようになったゆえんである。

「なんだ、そんなことだったのか。恥ずかしがることはないじゃないか。」そう思うと猛烈に腹が立ってきた。今度は元気を出して先生をやれる。子どもが指4本突き出してきたとしても、それを笑って受け流していく。あるいは、その子に話してやることだつてできるかもしれない。もう前みたいに恐れない。そう思った。それから数ヶ月、結核が再発し、10年間の療養生活で20代全部費やした。療養中、詩の仲間を得て詩を作り、書きためたものをまとめて詩集ト短調を発行した。その時、その詩集を発行したとき、一番大切なものが欠けていることに気がついた。部落のことについて触れてない。あれほど勇気づけてくれたのに書けてない。頭の中で理解できても、具体的な作品になって目の前に現われるために、もう一歩何かがいる。

療養所の仲間の中で、部落の話が出る。前みたいに気に病んだりもしない。でもそんな友に

「そんなこと言うなよ。俺はそうなんだから。」とは言えない。例えばこういう言い方をする。将棋をしている仲間と、憎まれ口をたたき合いながら「お前、きたない手つかうな。まるで四つみたいな手をつかうな。」と言う。非常に仲のよい友であつたがその友に「俺はそうなんだよ。」とは言えない。そういう感じ方でしか、部落をみていない。いくら表面仲がよいように見えても、その部分だけはあかせない。胸が開けない。そのもどかしい思いを磯村英樹氏（詩集「駱駝」の仲間）宛に綿々と綴った手紙を送る。返事が来た。「友のことば」という題で詩集「部落」に入れてある。

「よく話してくれた。いろんな差別問題には口角泡をとばして論じていながら、身近な問題であるこの部落問題に全く無関心であつた自分が恥ずかしい。」

磯村さんという人は私を喜ばすために上手を言うことの全くできない人、正直に自分の思いを言うことしかできない人。その人がこの問題に無関心であつた自分が恥ずかしいと書きながら、その一番最後のところに「まず身近な問題から取り組まなければならない。若い自分の息子が部落出身の人と恋愛し、誠実に息子を愛してくれるのだったら、私は喜んで息子と力を合わせて周囲の圧迫とたたかうでしょう。」と書いてあつた。

今、正直言つて私の周りの仲間で「こだわりません。こだわるわけがない。」という仲間をたくさんもっている。でも昭和30年代に、私はこれを聞いて、しかもその言えない磯村さんから聞いて、こんな友達のいるところだったら何でも言えると思つた。私の一番底にある部分、今まで誰にも聞いて見せたことのないものを、こんな仲間のいるところだったら、何でも言えると思つた。何でも話せると思つた。話さなければいけないと思つた。

「駱駝」63号に、「指」という作品を出した。部落とすぐわかる作品を初めて書いた。それを編集した磯永英雄が63号のトップに載せた。表紙を開けたところに載つた詩、そして磯永さんは「あのレイアウトの意味わかつたかね。」と聞かれた。そして私に「あれは十字架だよ。君はそこから逃げてはいけないんだ。君はこのことをうたうんだ。」と言われた。

その時一通の手紙をもらった。「『指』という作品、私が詩の道へ足を踏み込んだのはこのことをふりかざしたかったのにどうしても書けず、あせりだけですのに、あなたが書いてくださったことは嬉しく敬意を表したいと思います。書いてください。私も書きます。」「駱駝」の仲間の中に私以外に部落のものがいた。しかも、そのことを書こうと思つて入つてきた。何年もののに一行も書けない。「あなた、よく書いてくれました。私も書きますから、一緒に書きましょう。」そういう仲間がいた。それが詩集「部落」を共に著わした真原牧なんです。そして、そういう思いをたたきつけてきたのが「五本目の指を」という詩です。

私が はじめて恋を知つたのは

二十一の秋

私はかぎりなく彼をしたい

彼はやさしく私をいたわっていたようだった

冬になると

彼の部屋のコタツに火を入れて

私達は話し合った
私が彼のオヨメさんになる日のことを

その夜は 雪がシンシン しずんでいた……

“春”になったらネ
指切しましょう
私の指がかわいいと言って からめた指を
二人は永い間大切にしていた

その彼が 私を四本指 だと言い始めたのはいつからだったか
彼のお母さんにあった日から
二人の上に春は来なくなっていた

私には見えないけれど
たしかに指が 四本だという

切れたのは指切した指だろうか
約束を守らなかったのは 私ではなかったのに
私は四本指の娘だという
持って生まれた不幸せだという

私は想った
私は泣いた

生まれ出た家のひくいのきのこと
ねこのひたい程の耕地をむさぼる一かたまりの部落民のこと
血族結婚の末の精神異常者のこと
若者たちは自暴自棄
追いかえされた若妻
テテナシ子

私は死のうと思った
傷をいやす為に
ちゃんとした五体になる為に
私の心の中でプツツリ切られてしまった
五本目の指を

その指をかえせ
その指をかえせと
うたいながら

傷口はいえないだろう
傷口はいえないだろう
傷つけたものへのいかりとなって
その口はひらくだろう
なお大きく
深く
いたみながら
うずきながら

《「五本目の指を」真原 牧》

この思いは、人を愛したことがある人間なら誰にでもわかる思いです。私のどこが違っている
というのか。私はこの詩集「部落」を作るときに、息子の手形を押させた。その子がもう中学3
年を卒業します。そのとき、三つ上だった子が、高校を卒業する。私は子供が生まれてきた時に、
療養生活のため結婚が遅れ、36才にして初めて子供を得た喜びを思いきり表現したいと思った。
そして、差別の現実を訴えた詩を「これでもか、これでもか。」と書き続け世に問い続けた。

《吾子誕生》

おおい
ミンナ 見てくれ
りっぱに手足の揃った男の児だぞ
よつく 見てくれ
指も五本だ
欠けてやしないぞ

どっことも違わないんだ。この子たちに決して悲しい思いをさせてはいけない。ふるさとを人前
で口にできないような、そんな子供にしてはいけないんだ。部落問題を本気になって学ぶ、そう
いう姿勢は子供を得て、はつきりしかも強いものとなった。「差別」そんなものまだあるのかと
いう声を聞くことがある。私はその実例をいくらでもあげることができる。詩を書き始めて20年
にもなるのに、まだいくらでもその例をあげることができる。

残念ながら、例えば結婚には、厳しいものが残っている。残っているといいながら10年前と20
年前と、時代を輪切りにしていくと歴然と違う。そのことは、厳しいものが残っている中でも認
める。就職はというと、下松、徳山、光と従業員5000人を超す大工場の林立すると真中にあって、
200戸1000人の人口をもつ高州にたった一人の工員もいなかったという事実、この事実を詩に書
くことで激しく訴えた。こんなばかなことが厳然と存在している。昭和34年当時、何万という工
員を抱えた工場があり、どんな小さな部落にでも一人や二人の工員がいる。そのような状況の時
にも高州には一人の工員も、存在しなかったというひどい就職差別があった。

《高州 ーわたしのふるさとー》

また 聞かねばならない

学校の卒業期が近づいたので

あねえに優秀じゃったのに

コウバのシケン

あの子もだめじゃったげな

やつぱし

ああ

「やつぱし」と

武田薬品 八幡製鉄 日特管 日立 日石 鋼板 徳曹

出光 e t c エトセトラ……

ぎっしり並んだ工場地帯

そのどまん中に位置しながら

“たかす”には たった一人の臨時工さえない

二百戸の家並がひしめき

働きざかりの若者がきょうも仕事にあぶれているというのに

ー1959年作ー

今では何人もいるが、20年前の悪い状態が一度によくなるはずはない。少しずつ少しずつ良くなってきている。そういう状態の中で、特に中高年に不安定な仕事をしている人がたくさんいる。町並みはきれいになり、住宅はたくさん建ち、公共施設も立派なものができて保育園もできて、結婚もできつつあるが、差別の傷を抱え込んで生きているのが私の部落の現状である。

昭和49年、地域の中で若者たちと部落問題を勉強する会を始めた。光市地域部落研30人、約3年間、毎週部落問題を勉強することを始めた。

- ・自分たち自身の生き方について考えていく。
- ・自分と部落問題とのかかわりについて考えていく。
- ・私自身の生きざまを通して考えていく。
- ・高州の人たちの生き方について学んでいく。
- ・高州の人たちは何をして生きてきたのかを学んでいく。

私たちは部落差別の現実を具体的に学んでいった。部落の仕事を調査していく中で、なぜか分からないが、5月に部落の親たちが出ていくことがわかってくる。部落の人が地元では稼ぎようがない。地元では子供を養っていくことができない。そうしたことから、たくさんの部落の親が出ていった。部落ではそのことを“上下いき”といていた。その内容を学んできたとき、声を上げそうになった。恥ずかしいと思っていたことの中に、深い意味のあることを知るようになった。例えば、猿まわし、周防猿まわしの復活。部落の中でさえ、貧しさの差別の象徴のように考えられ、言われ扱われてきた、それが大道芸としてすばらしい内容をもっていることが後になってわかった。

母に「同級生のところにボロ買いにいかんといて、恥ずかしい。」と言った。「何の恥ずかしいことがあろうに、悪いことしているんじゃない。お前も大きくなったらわかるよ。」母はそう言っ取り合ってくれなかったけど、その頃の部落は、どういう状態におかれ、その中で人々が何とか生きようとしてどんなにもがき、どんなに懸命になっていたか。その様子を順々と知るにつれて、私はかつて自分が恥ずかしいと思っていたことが恥ずかしい。そう思うようになった。

子供で学校へいかない子がたくさんいる。例えばよそ木のなりものとか、芋とかそんなものとして食べるような子は、高州にはたくさんいる。そういう友が高州にいるということはとても恥ずかしかった。自慢できることではない。悪いことに決まっている。しかし、そうしたときのなり木のものを取ったり学校へ行かない。子供たちの悲しみについてはそばで見ているがよくわからなかった。部落問題をじっくり学ぶ中で、その時の子供たちの悲しみや、子供をおいて出る親たちの悲しみが改めてわかるようになった。

例えば“上下いき”“猿まわし”のことを書いた「出立」（でだち）長い詩がある

おとうとおかあが
いよいよ じょうげに行く
けものの臭覚のようにそれをさとった僕は
何といわれようと
その日ばかりは 学校へ行きたくなかった

“きつと沢山みやげ買うてやるけえ”
おかあは そういつて僕をなだめすかし
学校へやろうとするのだけど

出してしまうと
一年近くも おとうたちは帰ってこない
幼い兄妹とばあちゃんだけの生活なんぞ
想っただけで泣きたくなってしまう

僕は泣きじゃくって登校を拒んだ
～～去年も学校に行ってる間に
ふたりは 旅に出てしまった
学校から帰ってそれを知った僕は
無駄とわかっていながら
泣きながら 駅まではだしで走った

春までの 淋しかった一年を忘れない
みやげなんて要らない 何にも欲しくない

とうとう おとうの平手がとんだ
それでも 僕は学校へは行かなかった
おとうの目がぬれていたのを覚えている

出立は一日延びただけだった
夏も間近いという頃なのに
僕たち兄妹には

冬のような凍った季節が またはじまった

《出立（でだち）》

これは親たちを上下に送ったそういう人の話を直接聞いて、詩にした作品であるが、その残された子供たちが、例えば学校へ行かない。両親も誰もいなくて子供だけしかいない。そういう家庭がたくさんあった。また、両親がいてさえ学校へ行かない家庭がある。両親がいないので学校へ持って行く金がなくて、食べるものもなくなって、よそのなすび畑でなすびをもぎながら塩をつけて食べたという話を聞いたとき、どうしてその時学校へ行かなかったんだと、そんなこと言えるはずがないと思う。

そういう反論を許さない。厳しいものが存在したということに思い至る。子供が非行に走り、手に負えないようになった。その時にやはりその子供の裏側まで知って、その子供の身になって考えてやらないといけないうことをこういう問題を学びながら改めて思う。

部落問題を学びながら「同和教育への希い」と題をつけたが、どうあつてほしいか、私の体験からどうあつてほしいかということをお子たちに伝えてほしい。何よりも本当のことを教えてほしい。それもきちんと、あやふやなことではなくて真実を伝えてほしい。

部落が恥ずかしくなくなったのは、部落問題を自分で勉強するようになってからだ。理論としてわかった段階ではまだだめだった。母のことにしても、上下いきにしても、高州の人の悪いと言われる言葉にしても悪いわけではない。上下の商売の中で使う隠語が部落の中で使われる。それを子供が真似をする。言葉が悪いのではなく。あれは上下の中で商売するのに必要な大切な手段としてあみだした貴重な言葉であつたんだ。改めてそのことを知って言葉の収集をやっている。それだけで会話が出来るぐらいに豊富な内容をもっている。恥ずかしいと思つたことも本当の姿を見ると、そうでないんだということがわかる。

徳川時代の差別というけど、山口県に残っている膨大な資料を丹念に調べていくと、それはつくられたということがはつきりわかってくるし、地区外の人にとっては、差別しないということだけでも罰せられたという事例が、御仕置き帳にはつきり残っている。本当のことをきちんと学ぶことによって、恥ずかしさなんか存在しない。恥ずかしいのはむしろ、そういうことに身を縮め、卑屈な姿勢でいることが恥ずかしいんだということを公然と胸張って言えるようになった。

次に、何でも信じ合い、話し合える仲間を作っていかなければならないと思う。「お前だったら、絶対、俺の一番恥ずかしい部分と言える。」そういう人をもっているか。そういう人をもっている人は幸せだ。人のよつては妻にだって言えない部分があるかもしれない。でも、お前にだっ

たら俺の一番恥ずかしい部分と言える。一番底にある部分、全部さらけ出せる。そういう信頼し合える仲間を作るといことが、この問題を解決していく大変大きな力になる。私は自分が潤間先生に習ったはずなのに、どうして部落のことが書けなかったか。それに近いような作品は書いている。でもはつきりそうだとすることがなぜ書けないのか。

私は磯村さん、磯永さんや真原という仲間を得て、ありったけのものが書けるようになった。人間は、本当に傷みを味わったものでなければわからないという。しかし、そのものはわからないかもしれないが、わかち合うことは可能だと思う。人間だったら……。本当に悲しんでいる人間と一緒に腹を立て、一緒に悲しむことは人間だったらできる。他人の痛みがわかるということは、同和教育の最も大切な部分と思う。

一人一人の人間、その生命の尊さを思う。人間とは掛け替えのない存在だと考える。これは差別問題を考えていくときに、非常に大切な基礎となる。私はどんなにつまらない私であっても、もう一回私に生まれてくることはできない。たとえば知的に全く恵まれない人、障害を持つ人、それがどんなに重い一生であろうと、たった一回の人生、それを大事にしないでどうする。それを駄目な人間だからと言って、役に立たないからと言って、その人間に価値がないもののように、いかにも人間としての値打ちが下がっているように言う。

部落問題、差別問題というのは、人権の問題だと言われる。人権無視とは、まさに人間を人間扱いしていない。人間としてあたり前の扱いをしていない。一人前の扱いをしていない。どこも悪くない。本当にその人を愛しているのに、どうして部落だからいけないというのか。学生時代、あんなに一生懸命に勉強して何でもできて働く意欲と能力もあるのに、部落だからということで職をシャットアウトとする。そんなことが許されていいのだろうか。人権を侵している。そのことを許している。見逃している。新しい憲法の侵してはいけない部分、97条に基本的人権の本質が書いてある。

日本国民に保障される基本的人権は、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であって、これらの権利は過去幾多の試練に耐え、現在及び将来の国民に対し、侵すことのできない永久の権利として、これを保障するものだ。

人間は人間として大切にされなければならない。人権とは人類の宝であり、差別はその宝への挑戦なんだ。許されない。人間が人間として大切にされる世の中、私はどういう政治形態になっても、これは一番大切な基本だと思う。そして、私たちの責務は、本当の民主的な世の中をつくることだと思う。本当の民主的な世の中とは、誰もが生きてきてよかったと思える世の中、それをつくること。それが私たちの生きることの意味だと思う。

自分自身のためにしなければならない。子供たちのためにしなければならない。そうしたときに部落問題は、部落の人だけの問題ということは、かりにも言うことはできない。生きがいのある社会にするために、一緒にがんばっていく。それが子供たちへの最大の財産をつくることになっていく。「これが私のふるさとです。」と私の子供も、どなたの子供も、胸張っていえる。そんな社会にしたいと思います。

(1983.2.5.演題「同和教育への希い」ー今なぜ自分自身の問題なのかー)